

うるくの歴史と文化を語る会  
**会報 ガジャンピラ**  
 第27号

発行：うるくの歴史と文化を語る会  
 発行人：赤嶺健治 編集人：赤嶺和雄  
 〒901-0156  
 那覇市田原4-1-1 JAおきなわ小禄支店内  
 TEL. (098) 857-1175 FAX. (098) 852-1486

## 年頭のご挨拶



赤嶺 健治  
 （うるくの歴史と文化を語る会 代表）

あけましておめでとうございます。新型コロナウイルスの収束が見えない状況ですが、会員とご家族の皆様にとりまして、本年もお健やかで幸多き年でありますようお祈り申し上げます。

コロナ禍のため、本会も活動を休止しておりますが、事情が好転し、再開できる日を待ち望んでいる所です。2002年に発足した本会は、会員諸氏とご支援頂いた多くの個人や団体の方々のご理解とご支援のお陰をもちまして、本年で創立20周年となります。この間、17回の講演会、26号までの会報の発行、15回の「うるくまーい」などを実施してまいりました。

昨年、本会の活動でお世話になったお二人の恩人がご逝去されました。お一人目は、生涯を教育に捧げられた島袋文雄氏（元安謝小学校校長）で、9月3日に92歳で永眠されました。島袋先生は、大著『那覇市教育史』（2000-2002年）の主任編纂員を務められた他、終生学校教育についての指導助言に当たられました。先生には2019年6月の本会定期総会の際に、記念講演をしていただきました。お二人目は、1851年にジョン万次郎が5か月余り滞在した豊見城市翁長の高安家の5代目当主高安亀平氏で、9月5日に93歳でお亡くなりになりました。高安氏は、2018年2月に、私どもが第13回「うるくまーい」で高安家を訪問した際に、懇談会会場と湯茶と茶菓子まで準備して歓待してくださいました。その後お二人は、貴重な関係資料も多数提供して下さいました。改めて、お二人への深甚なる謝意を表し、謹んでご冥福をお祈りいたします。

最後に、皆様とともに本会の更なる発展を祈念して、年頭のご挨拶といたします。



## 追悼～島袋文雄先生～

長嶺 和子  
 （うるく歴文会会員 元小学校長）

昨年2021年コロナで沖縄が最悪の事態に陥っていた9月初旬、島袋文雄先生（享年92歳）が亡くなった。そのことを家族のみで弔ったとの新聞のお知らせで知った。最後に聞いた先生のお声は2020年7月、長女の島袋香子さんの北里大学学長就任のお祝いを電話で伝えたときで、まだまだ元気で頑張っておられると安心し、そのうちコロナが収まったらお祝いにお花でも届けたいと思っていた。

先生とうるく歴文会との接点は、2019年6月第17回定期総会後の記念講演『戦前期の小禄村の学校教育及び学校における軍国教育』に講師としてお迎えしたことです。11月発行の会報ガジャンピラ25号にその内容が紹介されている。

そもそも私と島袋先生とは見えない不思議な糸で繋がっていた。私は、夫長嶺弘善に薦められて『与那国善三をとおして地域をみつめる 小禄尋常高等小学校（小禄第一国民学校）最後の校長について』（後に最後ではないと島袋先生に指摘された）を会報ガジャンピラ第17号に書いた。与那国善三の娘（私の母の異父姉）、つまり私の伯母は島袋先生の親類と結婚して繋がっていたことを先生から聞かされた。

ともかぜ振興会館が所在する場所にあった那覇市保健センター2階の那覇市立教育研究所で私が指導主事をしていた1996年、島袋先生も同じ研究所の一室で那覇市教育史主任編纂員の任務にあたっており、伯母の自宅にある与那国善三の膨大な著作物や資料などを島袋先生と一緒に見せて貰ったことがある。あれ以来、先生とは教育史や地域史の掘り起こしなどで指導助言をして貰っていた。伯母や祖母（善三の最初の妻）が島袋先生と繋げてくれて、私をこの赤嶺地域に結びつけているとつくづく思われて感謝です。

お悔やみを伝えたいと、コロナが収まった頃に亡き先生の自宅を訪ねた。偶然にも四十九日の法要の行われた日に当たっていて、夫と二人手を合わせることができたことでホッと安堵感を覚えている。先生ありがとうございました。ご冥福をお祈りします。

## 「小禄クンジー」 沖展入選（浦添市長賞）



上原 八重子

（小禄クンジー研究会会員・本会員）

今回、第72回沖展にて、浦添市長賞をいただいた。

初出品した4年前の第69回から、毎年欠かさず「小禄クンジー」として出品し、有難いことにいずれも落選することなく、あの春先のイベント『沖展』に展示してもらえたのは大変励みになったが、今回は『浦添市長賞』受賞で歓喜。更に、小禄クンジーの会員からもう一人、長嶺民子さんが初出展し入選したことで、嬉しさは倍増です。

「小禄クンジー」の知名度を少しは上げただろうか。

「小禄クンジー」の良さの一つは藍染です。が、やはり生き物である発酵建て藍染料との付き合いは、そう簡単ではない。日々の藍建て管理もそうですが、改めて藍染の難しさを思い知らされた、という裏話を少し話します。

当初出品予定であった作品は、意匠設計から段取り、<sup>かすりくく</sup> 拵括りまで、順調に仕上がっていたが、素材（麻混紡の糸、もしくはその糸処理の仕方）に問題があったのか、藍染で、綺麗な濃紺に染まったかに見えたのが、これが定着せず水洗いで流れてしまう、何度重ね染めをしても弾かれる、という悲しい結果に見舞われた。当然、出品することが出来ず、別に織り上げていた物を出すことにした。これが今回受賞した、たて拵の帯地になる。

この帯地は最初着物用として衣装設計をしたもので拵括りをし、地糸も揃え、藍染も納得していたのを織り機に掛ける段階で着物から帯仕立てに変えたものである（私の中で、ひそかにマイブームになっていた帯に）。

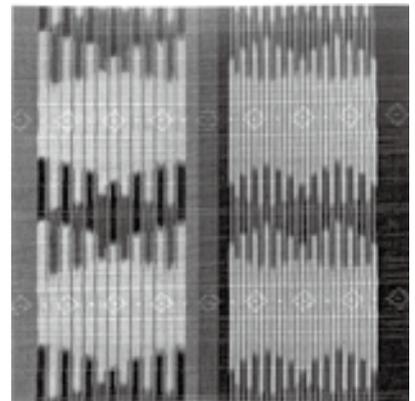
拵の染色まで終えた物の用途を途中から変えるのはまったく無謀だとは思えたのだが。

よこ糸の太さやら、たて拵の配置換えやら、筆では上手く説明できないので省くが、悪戦苦闘のはてに織り上げたのが今回の作品である。結果、浦添市長賞を頂いたのだから勇気を持って臨機応変にチャレンジするのも悪い事ではない、というのが率直な感想である。

真剣勝負で挑んでも、うまくいったりいかなかったり、なかなか大変な道のりで意気消沈することばかりだが、琉球藍の色香、浅地、紺地のバリエーションには不思議と癒され、また頑張ろうかなと思えてくる。

小禄クンジー研究会の作業所は、小禄自治会のご好意で、同敷地内にて活動をさせてもらい大変感謝している。

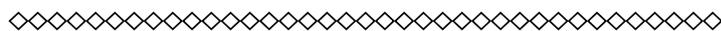
これからも多くの方に「小禄クンジー」を知ってもらえるよう、少しでもアピール出来たらいいなと思っている。



【浦添市長賞】

小禄クンジー 九寸帯（50×35）

上原八重子さん作品

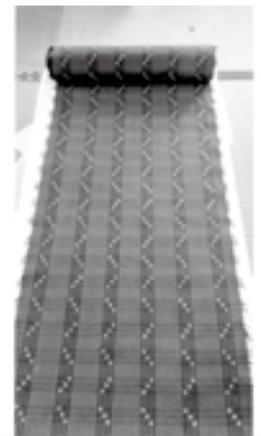


長嶺 民子

（小禄クンジー研究会会員）

織りを始めて9年ほどです。小禄クンジーのメンバーの方々に糸をくくり、琉球藍で糸を染め、拵を織らせて頂きました。拵の糸は実に様々な長さがあり、拵の糸を合わせて織るのに本当に苦心しました。何度もくじけそうになりましたが、先輩の温かいご指導に助けられ、織りあげることができ感謝です。機織りは織るだけでなく、糸の準備から始まる1つ1つの工程がとても大切です。その工程を丁寧に確実に行う必要があります。忍耐

が与えられます。行程毎に達成感が得られ、やりがいのある作業です。そして形になると喜びです。



長嶺民子さん作品

## 小禄クンジーについて

上原 八重子

（小禄クンジー研究会会員・本会員）

「小禄紺地」の起源は、儀間真常が、薩摩から木綿の種子を持ち帰り近隣の村に木綿栽培を広めたことに端を発する。明や朝鮮から輸入された木綿糸はあったと思われるが、木綿栽培から糸をつむいで織られたのは沖縄では最初である。県内で初の木綿織発祥の地ともいえよう。誇らしく思う。

泉崎村に住んでいた梅千代、実千代という二人の日本人女性に木綿の大帯を織らせた、というのはよく耳にするが、塚田清策著「文字から見た沖縄文化の史的研究」には、その大帯を国王に献上したともある。確たる資料があればなお嬉しいのだが。

木綿織は伝習所を設け広めたもので小禄布といわれ、これが後年の琉球紺の起源となり、本土に渡って薩摩紺となったようだ。

1900年（明治33年）頃から沖縄の織物は変わったと那覇市史にある。その以前から織物は盛んだったと思われるが、明治12年の琉球処分以降は歴史的な影響を受けながら様々な変遷があったと想像する。織物も島内需要から島外移出に変わる商品生産の時代に向かう。内地からの新しい織物技術が導入され、内地問屋が進出してきた。織物を専業とする小禄、垣花、泊では反物生産が分業で行われ興隆していく。そして本場小禄では、婦女子も主役だ。

1903年に小禄間切女子実業補習学校が設立され、1908年には島尻女子工業徒弟学校となるが、小禄村當間にあり機織りに重きを置くようになったので、後に当間の機織り学校と呼ばれるようになり、多くの織り子を養成している。かくして明治から終戦まで県内外に声価をあげ、名残惜しまれたのが「小禄クンジー」という事になるのだろう。

では小禄クンジー復興の機運が起きたのはいつ頃からだろうか？

クンジー関連の新聞記事を追って見ていきたい。

### 新聞記事から見た「小禄クンジー」復活の声

#### ① 『小禄紺ぜび復興を』 ～代表ら助成策など要求～

沖縄タイムス1985年（S 60）5月6日（以下記事より抜粋）

「小禄紺の復興に市のお力を一と小禄紺の復興を考える会の上原松子さん、赤嶺典子さん、仲程勝子さんから代表がこのほど、親泊市長を訪れ講習会を実施するための施設提供、助成策を要請した。」

#### ② 『小禄紺地、消滅の危機 農協に織り機設置』 ～肝心の染め手現れず～

琉球新報1989年（H 1）4月24日（以下記事より抜粋）

「小禄紺地は戦前まで同地区の有望な換金物で、（省略）小禄の貴重な伝統工芸品。（省略）第二次大戦などで小禄紺地を染める人たちが亡くなったほか小禄紺地も焼失してしまったのが、危機に陥った理由。（省略）」

かつて小禄の宮城と泊から染めたものを取り寄せて織っていた。ところが、宮城の染め屋が手を引き、最後まで染めていた泊の染め屋の古老の消息も分からない状態となった。」

「昭和六十一年（省略）小禄農協へ協力してもらい、織り機を置き、小禄紺地の後継者の養成もかねて織り子の養成を始めた。しかし、肝心の小禄紺地染めのできる人が見つからず、継承の道が断たれた格好になっている。」

「市教委文化課の古塚達郎さんは『小禄クンジーは染と織が分業で行われていた。一方がダメになると全部が消滅してしまう（省略）』と話していた」

※ ①の記事より上原松子氏、赤嶺典子氏、仲程勝子氏が「小禄紺の復興を考える会」を立ち上げ、行政にも働きかけていたことがわかる。②の記事からは1986年（S 61）、小禄農協の協力のもとに織り機を設置し、織り子の養成を始めたことや、小禄紺地の染めのできる人がいず、宮城や泊から染められた糸

を購入し、織り子養成に使用していた事が分かる。又、藍染の糸が得られなくなったことから継承の道が断たれたことも伺える。

小禄南公民館の玄関先ガラスケースに展示されているクンジーには仲程勝子氏の名が記されている。又、那覇市に保管されている寄贈クンジーに赤嶺典子氏の名がある。

②の新報記事を見た大嶺出身の長嶺（具志）美佐子氏が小禄南公民館に7点のクンジーを寄贈されている。それを受けて、③の記事が掲載された。

③ 『製作途絶えた小禄クンジー7点 小禄南公民館に寄贈』～那覇市西の長嶺美佐子さん(64)の母の形見～  
琉球新報1989年（H1）9月18日 ～市教委「復活の弾みに・・・」～（以下記事より抜粋）

「クンジーは、母親の形見の品で、タンスの奥にしまっているのを小禄クンジーの復活の危機を伝えた本紙報道を見て寄贈を思いついた。（省略）母親によって染から織りまで行われた（省略）辻、那覇からの注文が殺到したという。」

※上記7点のクンジーは、長嶺(具志)美佐子さんの母親によって染から織まで行われたとの事で、分業ではなく、個人で染から織まで行われたケースであり、家内工業で本土に送られたるタイプとは違う、いわゆる個人から直接注文を受け、織りあげていく一点ものであることが伺える。

那覇市教育委員会文化課に保存された7点を含む12点の寄贈されたクンジーを研究会も調査させてもらった。余談になるが、発足前から長嶺美佐子さんに“お会いしたい”との思いがあったが、寄贈から20年後の2009年、奇跡的に大嶺婦人部でのクンジー展示会場にて夢が叶う。84歳になられた美佐子さんにご対面。とても若々しくシャキッとされていた。後日、研究会の作業所にお招きし、話を聞かせていただいたのは貴重な経験となった。

④ 『小禄クンジー（紺地）を寄贈』～宇栄原の上原松子さん～

沖縄タイムス 1993年（H5）6月5日

⑤ 『幻にしたいくない小禄クンジー（紺地）』～戦後途絶え、高まる復活の声～

沖縄タイムス1993年（H5）12月27日 ～緻密な技法に多彩な図案～（以下記事より抜粋）

「今度こそ確実な復活に持ち込みたい（省略）行政や専門家だけの間で終わるのでなく、地元小禄地域の人たちを巻き込んだ輪の動きにしていきたい」（小禄南公民館長：前原信喜氏）

※④は、「小禄紺の復興を考える会」の上原松子氏が那覇市伝統工芸館（那覇市商工振興課）にクンジーを寄贈されたとの記事で、上原氏らの地道な活動が続けられている事が伺える。

その前々年から小禄南公民館の成人講座『小禄の歴史を訪ねる講座』（H3～H4）（館長：前原信喜氏）が開催され、その第4回目の「小禄クンジー」講座（講師：川前和香子氏）が盛況となった時期と重なり、

⑤の記事の掲載は、更なる小禄クンジー復興の再燃の声が伺える。

クンジーを寄贈された上原松子氏の実家は宇宮城で、尊父の安次嶺幸基氏は大正12年頃染屋を始め、昭和16年には当間学校の敷地内に染織工場を操業されている。宮城誌によれば年間700～800反も出荷されたようである。

⑥ 『小禄クンジー復元に期待』～公民館の連続講座 盛況～

沖縄タイムス 2006年（H18）10月24日

※講座は「発見！小禄の染色文化 小禄クンジー講座」（館長：新垣絹代氏）が開催され、参加した受講生により現在の「小禄クンジー研究会」が発足した。当初は織りに関して素人集団だが、今も中心となって当研究会の織の牽引役を担う上江田ひとみ（日本及び沖縄県の伝統工芸士）、屋富祖和美（首里織会員）を始め、会の運営や地域との関わりについて助言を頂く赤嶺和雄氏（うるくの歴史と文化を語る会）と共にスタートを切った。そして今は亡き當間一郎先生には長きに渡り当会会長として支えて頂いた。感謝に堪えない。かくして1985年からの「小禄クンジー復活の声」は21年を経て2007年に実現することになった。

## 「小禄クンジー研究会」発足から15年の活動

2007年（H19）⇒「小禄クンジー研究会」設立

2007年（H19）⇒文化庁の「ふるさと文化再興事業」を受ける（補助金200万円）

1、織の道具を揃える

2、聞き取り調査、着物調査を行い「小禄クンジー調査報告書」を作成

2008年（H20）⇒2回目の「ふるさと文化再興事業」を受ける（補助金80万円）

1、講師を招き伝承のための講習会を開催 講師：川前和香子氏、當銘正幸氏

2009年（H21）⇒小禄クンジー研究会の作業所を開所（字小禄760番地：借家）

1、小冊子「小禄クンジー」を発行する

2、字大嶺婦人部にて、「クンジーの展示と講話会」を開催 講師：小橋川順市氏

2010年（H22）⇒鏡原中学校文化祭にて「小禄クンジーの展示と紹介」

2011年（H23）⇒字具志婦人会にて「小禄クンジーの展示と講話会」を開催 講師：川前和香子氏

2012年（H24）⇒「うるく地域づくり連絡協議会」と共催で「クンジー展示・講話会」開催

講師：川前和香子氏

⇒宇栄原自治会の敬老会にて「小禄クンジーのファッションショー」を開催

2013年（H25）⇒「小禄クンジーの展示と紹介」沖銀小禄支店・田原支店・コザ信金小禄支店

2014年（H26）⇒那覇市商工課と「小禄クンジー復元支援事業」委託契約を締結

1、クンジー2着を再現し納品

2、納品着物2着と、これまで調査した40点の小禄クンジーの展示会を開催（那覇市伝統工芸館にて）

2015年（H27）⇒コザ信用金庫本店ビル資料室（沖縄市）に「小禄クンジー着物の展示」（貸し出し）

2016年（H28）⇒商品作りを展開「かりゆしウェア」「アクセサリー」等

2017年（H29）⇒「小禄クンジー研究会発足10周年記念展」の開催（10月21、22日・JA おきなわ小禄支店）

2018年（H30）⇒「なはの日、まちぐわ市」、「うるく地域ふれあい祭り」、「小禄南公民館まつり」等、

地域のイベントへ参加し小禄クンジーの周知活動を継続

2019年（H31/R 1）⇒藍染と織の体験受け入れ（中学生1人/那覇市の海外移住子弟研究生2人）

作業所照屋アパートの老朽化による今後の対策を検討

2020年（R 1）⇒作業所を「小禄760照屋アパート」より「小禄自治会館敷地内」に移す

小禄クンジー研究会は上原敬子会長（字小禄）の下、登録会員26名余で活動中。

現在は小禄自治会のご厚誼で同館敷地内にて作業を続けている。

地域の方や遠方からの来訪者にとっても、分かりやすい場所にあり、作業所見学や織体験がよりしやすくなったと感じる。興味のある多くの皆さんに小禄クンジーを知ってもらうには、まず足を運んで頂き見聞してもらおう事が肝心だと思うので、敷地内で作業をさせていただけることに感謝しています。

### 参考・引用文献

(1) 『文字から見た沖縄文化の史的研究』 塚田 清策著 錦正社、1968年

(2) 『時代を拓く儀間真常：人と功績』 田名 真之著 那覇出版社、1994年

(3) 『那覇市史 資料篇 第1巻2 薩琉関係文書』 那覇市企画部市史編集室 1970年

『那覇市史 資料篇 第2巻中の7 那覇の民俗』 那覇市企画部市史編集室 1994年

(4) 『宮城誌』 宮城誌編集委員会 2006年9月

(5) 『小禄クンジー調査報告書』 小禄クンジー研究会 2008年3月

## 近代の小禄地図を読む

——参謀本部陸地測量部の那覇図には欠陥がある——



〔20代自画像〕  
幹事 長嶺弘善  
(大学非常勤講師)

地形図を眺めると楽しくなる。ここに集落があり、この道から隣集落に行ける、あるいは丘陵で隔てられているなどと、いろいろ想像する材料を地形図から得られる。次の地形図は、『那覇全図』（那覇市史編集室1978年12月）の一部である。その説明（凡例）に「この地図は、大正10年、参謀本部陸地測量部測図の5万分の1地形図を拡大したものである（地名は右横書き）」とある。見た目に美しいが子細に地図を読むと疑問が湧いてくる。字赤嶺・字當間集落の中間付近は小禄村のほぼ地理的中心に位置し、小学校があった筈だが見当たらない。図中大楕円内左側に標高30.29mを示す水準点記号「□」と、その

南側に小さな建物記号3個、さらに一間幅道路を挟み村役場記号「○」があるだけである。大楕円内右側（字金城集落の南外れ）には学校記号「★」があり、その右肩部には校舎らしい建物記号も描かれている。

大正10年頃の小禄村には、小学校が2校あった（拙稿「小禄尋常高等小学校の沿革」ガジャンピラ第24号2019年3月）。1880（明13）年に県下最初期の小学校が字小禄に設立され、1891（明24）年に字赤嶺に移転し、小禄尋常小学校となった。1902（明35）年には西部小禄尋常小学校と改称し、字金城に東部小禄尋常小学校（金城学校）が分離した。そして翌1903（明36）年には改組改称により小禄尋常高等小学校（以下、小禄尋高）となり、東部小禄尋常小学校が小禄尋常小学校と改称した。1912年（大正元年）には小禄尋高の南側に小禄村役場（記号「○」）が字小禄から移転新築した。その頃小禄尋高は升形の校舎だったが、1923（大正12）年に、赤レンガ造り2階建て校舎2棟に新築された。つまり、1903（明36）年以来、小禄村には小学校が2校あった。字赤嶺近くの小禄尋常高等小学校（通称當間学校）、字金城近くの小禄尋常小学校（通称金城学校）の2校である。しかし、戦時体制（国民学校令）のもと1941年に小禄第一国民学校と小禄第二国民学校となり、沖縄戦中1945年3月23日の赤嶺村空襲で役場とともに破壊された。レンガ壁の一部が残るのみであったという。

『那覇全図』（原典：大正10年参謀本部陸地測量部測図の5万分の1地形図）

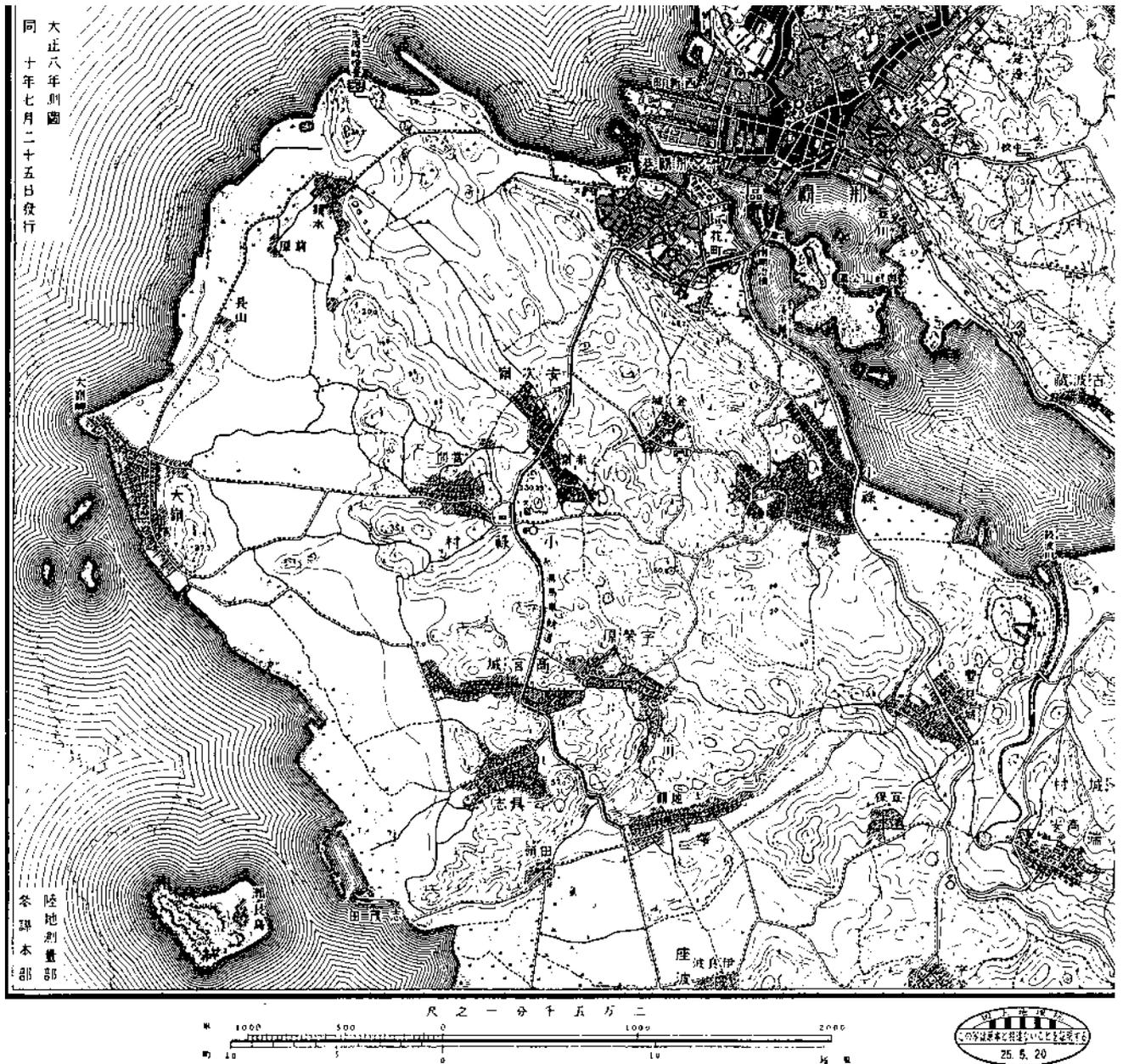


ところで、実は、と言うべきか、陸地測量部は大正8年（1919年）にも地形図を作成している。那覇市歴史博物館（前身は市史編集室）に問い合わせても見当たらないので、直接国土地理院に問い合わせた。そして「測量成果の謄本交付申請」を行い取り寄せたのが、次に示す【1919年小禄地図】である。

この地図を読むとはっきりする。水準点「□」南側に、学校記号「★」があり、校舎らしい建物記号もほぼ真四角（升形と一致）に描かれている。そして道路を挟んで役場記号「○」と続く。情報量が多く当時の状況を反映している大正8年測図地形図があるのに、市史編集室は何故に大正10年測図地形図を原典に『那覇全図』を作成したのだろうか。作成年度が新しい方が、社会発展に伴う様々な社会基盤等が反映され最新情報に基づくと考えたのだろうか。あるいは、大正10年

（1921年）5月に那覇市市制が施行された「記念年」と関連付けようとしたのか。しかし、大正年間を通して沖縄戦まで存在した小禄尋高が『那覇全図』では存在しないことになった。これは『那覇全図』の誤りであると言わざるを得ない。では、『那覇全図』の原典である陸地測量部大正10年測図地形図をどう読むべきだろうか。

【1919年小禄地図】原典：大正8年測図参謀本部陸地測量部2万5千分の1地形図  
 沖縄群島11号（共13面）那覇7号那覇の2（部分：湖南）



〈注1〉地形図謄本の罫線枠左外にある「大正八年測図 同 十年七月二十五日発行」及び「陸地測量部 参謀本部」の記載を枠内図中に入れ、謄本罫線枠下中央部の縮尺表示と枠下右の国土地理院証明印は左にずらした(konan@nirai)。

〈注2〉罫線枠外上部右肩には、「軍事極秘(戦地ニ在リテハ軍事秘密トス)」とある。『『大正・昭和琉球諸島地形図集成』解題』(柏書房1999年11月)によれば、当該地形図は完成とともに秘密扱われた。そして第二次世界大戦敗戦直後の混乱期に、焼却に手が回りかねていた参謀本部地下室から関係者によって密かに持ち出され、今に伝わり、国土地理院に収蔵されているという。

陸地測量部は大正8年地形図の成果の上に大正10年地形図を作成した筈である。しかし、金城学校は表記し、小禄尋高を省略した。思うに、縮尺が2分の1になることで作図スペースも半分になり省略したと一応推測できる。それは等高線省略に表れている。しかし、5万分の1地形図でも小禄尋高の学校記号「★」や建物記号表記、更に糸満馬車軌道の「糸満」と始発駅「垣花町」の文字表記スペースは十分にある。小禄村以外では、那覇区「二中校」(現那覇高校)表記が消えている。また、字「大嶺」を陸地でなく海中表記にしたので読みにくく、さらには小禄村・豊見城村の境界線上に字豊見城の「見」が重なっている。大正10年地形図作成者の技量不足なのだろうか。

以上のことから、小禄村以外に旧那覇区・旧首里区・真和志村にも欠陥や不備があるかも知れない。ひいては沖縄本島に限らず、宮古・石垣・諸離島など琉球諸島全域に同様の問題があり得る。大正10年参謀本部陸地測量部測図5万分の1地形図の信頼性に関わる問題である。私が小禄赤嶺出身で、門外漢ながらも小禄の歴史等について興味を持ち調査をしていることで気付いた大正10年版『那覇全図』の問題点が、1978年作成以来43年間も見過ごされてきた。早急な『大正8年那覇全図』刊行を期待する。〔2022年・あらたまる歳の初めに〕

## 小祿南公民館が主催する令和3年度 You Tube 成人講座

高 良 広 輝  
（本 会 幹 事）

うるくの歴史と文化を語る会が協力しました。

「地域の魅力、再発見！小祿地域の歴史を知る～Oroku Historia～」と題し、2021年11月29日（月）から12月20日（月）まで You Tube 動画を視聴し学ぶ講座です。

本来なら公民館での実施になりますが、コロナ禍のためオンライン講座となり、受講申込者への限定配信でしたが、要望等もあり一般の皆様でも2022年1月24日（月）から視聴できるように公開されましたのでご覧ください。

はじめに「小祿の成り立ち」と題し、古塚達朗さん（まーいまーい NAHA）が講師を務め、小祿ってどんな歴史があるの？・小祿の由来・産業・小祿まーいをしてみる（動画撮影協力）・田原公園フェーメーシチャグイ家のフルと赤嶺勢理客の講話をしています。



※携帯スマホ等で QR コードを読み取ると You Tube 動画を閲覧できます。



つづいて「1970年～現代の小祿について」私、高良広輝（うるくの歴史と文化を語る会）が、小祿で起こった事件（事故）・区画整理で変わる小祿・交通網の発展を講話しています。

